



Title	中国雲南省における女子高校生への教育支援に関する事例研究：非経済的支援の長期的な効果について [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	王, 寧
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(環境科学)
Dissertation Number	甲第15102号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86606">https://hdl.handle.net/2115/86606</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	WANG_Ning_abstract.pdf, 論文内容の要旨



# 学位論文内容の要旨

博士 (環境科学)

氏名 王寧

## 学位論文題名

中国雲南省における女子高校生への教育支援に関する事例研究  
—非経済的支援の長期的な効果について—

(A case study of educational support for high school girls in Yunnan Province, China  
- The long-term effects of non-financial support)

「万人のための教育」など国際目標(UNESCO, 1990)から、「我々の世界を変革する: 2030アジェンダ」(United Nations, 2015)の持続可能な開発目標(SDGs)の目標4「質の高い教育をみんなに」に至るまで、教育の重要性は国際社会に認識されている。その中に女子教育の普及が目標5「ジェンダー平等を実現しよう」の達成するための重要な役割を担っている。中等教育や女子教育の普及の課題は、NGOなど支援機関や各政府が「誰ひとり取り残されない」理念に基づき、女子や少数民族などに対して、中等教育が受けられるように支援している。農村や少数民族の教育支援はミレニアム開発目標(MDGs)のもとで扱われてきたが、リオ宣言(1992)から始まる持続可能な開発の概念とともに、環境問題も社会問題も不可分なものとして、上記の2030アジェンダが定められた。本研究は、中国雲南省の三川併流などの世界自然遺産の保全を考える際に、その地域に住む女子に対する教育支援に注目することで、長期的には、自然環境の保全にもつながる環境問題の解決にも貢献することを目指している。

子どもへの教育支援プログラムは、NGOなど支援機関より運営され、子ども教育などへ使う奨学金など経済的支援や支援者と子どもの手紙のやり取りや支援者が子どもへの訪問のような交流活動など非経済的支援が提供されている。教育支援効果に関する研究の多くが経済的支援と就学率・卒業率などの定量的な分析、もしくは、支援者の視点からの非経済的支援効果に関する議論を行っており、支援される子どもたちの視点からの支援効果に関する研究は数少ない。本研究は、中国雲南省の高校における教育支援された少数民族の女子学生を対象にして、支援される側の子どもたちの視点から子ども支援プログラムの長期的な影響について事例研究を行った。

第2章では、女子学生へのインタビューや支援者が参加した卒業式への参与観察など質的調査により、支援された女子学生の視点から非経済的支援の長期的な影響を明らかにした。支援者との手紙のやり取りや支援者が参加した卒業式での交流で、支援された女子学生らは支援者を自分の友人や家族などのような存在と見なし、支援者との手紙の交換を経済的支援の見返りとして強制されたものではなく、好ましい経験として認識していることを明らかにした。学生らは支援者の経済状況など理解し、「支援者のように他人を助けたい」といった支援者を自分のロールモデルにしていることも分かった。すなわち、非経済的支援は、経済的支援と異なり、彼女らへの重要な精神的な支援として、彼女らの成長に好影響を与えた。なお、このようなポジティブな効果をもつ非経済的支援

も、経済的支援のみで相対的に非経済的支援を受けられなかった学生へはネガティブな効果となっていた。

第3章では、卒業生へアンケート調査もを行い、第2章で用いたインタビューと併せて、支援された学生らの主観的な観点から、子ども教育支援プログラムによる、彼女らのキャリア選択や移住意向など未来の進路に対する長期的な影響を明らかにした。教育支援を受けた女子高校生は、ほぼ全員個人の意思通り、高校から卒業でき、大学にも進学できていた。「仕事が安定してから結婚したい」という回答者が多く、彼女らは10代で結婚した両親や早く結婚した小学生の同級生と異なる意識をもち、早婚を避けた異なる人生を歩み始めていた。数多くの学生は教員養成のための師範大学への進学を選択し、大学卒業後に故郷に戻ることを希望していた。さらに、山奥の故郷で社会支援に関わる仕事に就いた卒業生もいた。教育支援は、ある一定数の女子高校生の意識や人生を変えたことを意味する。彼女らは都市に生活するあるいは地元に戻るという移住について、両方に対して、数多くのポジティブやネガティブな回答をした。彼女らは、個人の夢や現実について様々な選択肢を検討しながら、将来の進路を選択することになる。

本研究は、事例研究として、教育支援された側の女子学生の視点から、非経済的支援は、就学支援に重要な役割を果たしていたことを明らかにした。農村や少数民族の女子の中等教育に対してより質の高い教育支援を提供することは、高等教育を受ける選択を与え、SDGsの目標4の達成に貢献できるとともに、児童婚や早すぎる妊娠を避けることができ、ある程度個人の意思により進路選択できていることを示した。このような女性のエンパワーメントはSDGsの目標5の達成への貢献にもなっている。今後、本研究は、限られた研究活動のもとで、農村や少数民族を受け入れる代表的な高校におけるデータを得ることができたが、他の同様な高校における女子学生や、女子学生の家族や学校関係者など、調査対象をより広げることが望まれる。支援を考える際、彼女らの内面的かつ主観的な声に耳を傾ければ、キャリア願望や移住意向など進路選択をより深く理解でき、彼女らの認識に寄り添った施策を見いだすだろう。